

令和4年度 学校評価実施報告書

幼稚園名（京都市立乾隆幼稚園）

教育目標

心豊かにたくましく、生き生きと遊ぶ子どもの育成

年度末の最終評価

自己評価	教育目標の達成状況、次年度に向けた見直し <ul style="list-style-type: none">子どもたちが遊び込める環境構成を考えた保育は制限のある中でも実践できた。生き生きと遊ぶ子どもたちの姿が日常として戻ってきたと思う。日々教職員でコミュニケーションをとり、子どもたちの育ちにふさわしいものか振り返ることでよりよい保育を目指してきた。安全管理的に関わるものは最優先で今年度同様進めていきたい。マスク着用は一年間続いたが、年間計画で予定していた保育や行事関係について内容をほぼ変更することなく実施できた。他施設や地域との連携や交流関係についてもコロナ禍が始まったころに比べてできることが増えてきた。次年度に向けてはより連携が深まるように他施設に働きかけていきたい。特に異年齢の活動は意図的なものだけでなく、普段の遊びの中でも自然と交流できるようになってきている。主体的な遊び、自己肯定感を育てる有効な手立てであると考えるので次年度に向けて、より深めていきたい。
------	--

学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 <ul style="list-style-type: none">ここ数年でクラスの少人数化は加速している。その中で園児獲得のための子育て支援の取組や預かり保育の取組はよくやっていると思う。口コミは大事なのでできることは手伝いたい。園の保育の取組として異年齢の交流保育はよい。地域コミュニティが弱くなっている現在、重要な取組である。コロナ禍の対策はきちんとしていたと思う。年間通して大きく計画を変更しないことで成果が上がっていると思う。インフルエンザの流行等は今後も考えられるので、感染症対策は次年度も必要に応じて講じてもらいたい。幼稚園が前から大事にしている四季折々の作物づくりやお茶体験、織物体験などは今後も継続してもらいたい。その上で新しく出てきているＩＣＴの活用がどのように幼稚園の保育に活かされるのか、子どもにとって効果のある使い方を探ってほしい。
---------	---

学校関係者評価の評価日・評価者

	評価日	評価者
中間評価	10月18日	学校運営協議会 理事
最終評価	2月16日	学校運営協議会 理事

(1) 幼稚園教育（保育の改善・充実）について

具体的な取組

- ・ 少人数の園として少人数の弱みを強みに変えられるように異年齢の取組を増やすことで自律性（折り合う心）を育む保育を実践する。
- ・ 子どもが心身ともに健やかに育つための安全安心な環境づくりを絶えず見直し、改善を図る。
- ・ 子どもが夢中になって遊び、自分の力を發揮し、友達と関わる楽しさや協働する喜びを感じるための教員の援助や環境構成を行う。
- ・ 保育の専門性を高め、子どもの育ちを保障していくために、園内研修を充実する。
- ・ 子ども一人一人へのねらいをもち計画性をもった保育と子どもの姿から一日の保育を振り返り、改善していく P D C A サイクルの確立（週案・個別の指導計画等の活用）。

（取組結果を検証する）各種指標

- ・ 幼児の姿の変容・週案の反省、評価の記述・事例検討
- ・ アンケート項目①「幼稚園は教育目標に向けての保育を行っている」②「幼稚園の環境は安全で子どもが豊かな体験ができるよう整えられている」⑧「子どもは楽しく幼稚園に通っている」⑨「子どもは今夢中になっているものがある」

中間評価

各種指標結果

・コロナ禍ではあるが、今年度は緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が出されず、保育や園行事が感染症対策をとりながらも計画通りに進められた。マスク着用や密を避ける取組等は継続し、コロナ前に戻ったわけではないが、子どもたちは夢中になって遊び込む姿が多く見られるようになった。子どもたちの遊びの検証も園内研修等で定期的にもつことができた。安全な環境づくりは日々の点検に努めている。

- ・アンケート結果①A86% B14%②A67% B33%⑧A90% B5% C5%⑨A62% B33% C5%

自己評価

分析（成果と課題）

- ・少人数園として取り組んでいる異年齢の活動は、互いに刺激を与え合い効果的な面が多く見られた。すべての子どもたちに有意義な活動になるように絶えず振り返っている。コロナ禍による活動内容については課題である。
 - ・安全についての環境としては、遊具の補修や木々の剪定を意識的に入れている。水遊びや運動会に向けて、子どものマスクの着脱は判断に苦慮したが、そもそもマスク生活（表情が読み取りにくい）が子どもにどのような影響があるのかは検証しなくてはならないと思う。
 - ・教員の援助や環境構成については園内研修で話し合い、週案を活用しながら保育の充実を図っている。すべての子が楽しいと感じる幼稚園になるように子どもの姿から一日を振り返る話し合いを今後も大切にしたい。

分析を踏まえた取組の改善

- ・少人数園としての保育の在り方は絶えず考えていきたい。目が届きやすい長所がある反面、友達関係が広がりにくく弱点がある。異年齢の取組は効果的に進むように研究しているが、教職員の子どもへの関わり方については絶えず振り返り、よりよい保育の在り方を見つけていきたい。
- ・コロナ禍の活動も慣れてきた面があるので、感染症対策をとりつつも、より遊び込む姿が見られるように保育実践をしていきたい。
- ・自園の研修だけでなく、他園の取組から学ぶことも多いので、幼稚園教育研究会にも積極的に参画していくようにしたい。

（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標

	<ul style="list-style-type: none"> ・園の環境や保育がより効果的なものになっているか。コロナ禍でもできることを考え、以前にやっていたことをそのまま実施するのではなく、新たな取組が考えられているか。 ・保護者のアンケートや日常の保護者からの聞き取った意見から検証する。
学校 関係 者評 価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ感染対策もごく普通にとれていると思われる。その中で祖父母参観や休日運動会等3年ぶりにできたことは喜ばしい。 ・以前に比べ、さらに少人数園になってきているが、異年齢の取組に力を入れているのはよい事だと思う。また幼稚園にもICTの環境が整えられていることは望ましい。 ・実際の体験を大切にしている幼稚園として栽培活動は継続してもらいたい。 ・アンケート項目の「自分のことは自分でする」や「親子で絵本を読む」については、家庭教育に関わるところであるが、園に期待しているところもあるので手立てを考えてはどうか。

最終評価

	<p>(中間評価時に設定した) 各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・後期も全国的に感染者数は増えたが、最後まで園の取組を中止することではなく、マスク着用や毎日の健康観察は続いたものの夏休み明けのプールでの水遊びから始まり、休日運動会、全学年を参観していただける生活発表会など、年間計画通りに取組が進められた。 ・本園が大切にしている異年齢の交流保育も感染対策を考えながら、ここ数年の中では大いにできたと考える。友達との関わりを通しての学びも増してきた。子どもたちも園庭で夢中になって遊び込む姿が以前より多く見られた。 ・アンケート結果①A95% B5%②A80% B20%⑧A90% B10%⑨A75% B15% C10%
自己 評価	<p>分析 (成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・後期もコロナ禍とはいえ、異年齢の交流保育は継続した。教員で振り返っているが、様々な面で少人数のマイナス面を打ち消す有意義な活動であった。ただその学年だけでやった方がいい事は学年ごとでできるよう必要に応じて考えていきたい。 ・外遊びの時やマラソン実施の時などマスクを外す場面も設定している。今後はその場面ごとの状況に合わせて考えたい。大人や子ども同士の表情を見ることは大切だと思う。 ・インフルエンザで学級閉鎖はあったが、概ね活動が計画通りにできた。後期も園内研修を大にした。そこでは教員の援助や環境構成について話し合い、すべての子が楽しいと感じる幼稚園になるように保育の充実を図った。 <p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・少人数園としてのマイナス面は、遊びの広がり、友達関係の広がりである。異年齢の取組により学年を超えた遊びや関わりが見られている。教員同士、一日を振り返り、次の保育実践になるように子どもの姿をもとにした話し合いを継続したい。 ・講師や他園の取組から学ぶ研修がリモートで行われることが多くなった。園において受けられる研修なので、以前より増して参加し、学ぶことが出来ている。ただ実際に研究保育などの参観ができるようになればよい。 ・安全点検は怠らず、より良い環境構成の根本にある安全な環境づくりとして、遊具の補修や木々の剪定は継続していきたい。

学校 関 係 者 評 価	学校関係者による意見・支援策
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今年度は休日運動会もマラソン大会も生活発表会も保護者の参観制限をせずにできたことはよかったです。他の学年の子どもの様子も見てもらえることで保護者の学びにもつながるのではないか。 ・ 少人数園としての異年齢の交流保育は確かに有効な取組だと思う。園の実態に応じた取組を今後も続けてほしい。 ・ I C Tについてはその可能性について試行していくことは大切で、その検証も必要だと思う。並行して栽培活動や伝統文化に関わる茶道体験や織物体験はぜひ続けてほしい。 ・ 絵本ママの取組もあるが親子で絵本に触れる重要性を保護者に伝えていってもらいたい。

(2) 幼小連携・接続に関して

	具体的な取組
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 乾隆小学校、紫野小学校との連携、交流を通して教員の相互理解を図り、幼小の円滑な接続を推進する。(互いの便り・行事予定を交換し、交流のための年間計画を作成する。) ・ 乾隆小学校、紫野小学校との授業参観・保育公開の相互交流と共に、合同研修を行う。 ・ 小学校期の学びにつなげる「学びに向かう力」の育成を意識した保育を推進する。
	(取組結果を検証する) 各種指標
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 交流の事前・事後の検討内容について ・ 公開保育・合同研修の回数・内容 ・ アンケート項目③「保幼小連携、地域との連携等の取組は子どもの育ちにつながっている」

中間評価

自己 評 価	各種指標結果
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 乾隆小学校や紫野小学校とは、互いの便り、行事予定の交換はできた。ただ現時点（中間期）で子ども同士や教員の交流は再開できていない状況である。8月の幼保小の研修は配信での研修ということもあり、両小学校とも参加いただけた。乾隆小学校とは合同研修ももつことができた。 ・ 乾隆小学校とは互いの学校運営協議会の委員になっている関係でもあり、管理職同士のつながりはある。施設を借りる行事もあり、日常的な情報交換は取れている。 <p>アンケート結果③ A52% B48%</p>
	分析（成果と課題）
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 直接的な交流は、今年度も再開に至っていない。特に子どもに関してはほとんどできていない。入学した学校ごとに教員が連絡を取ることは継続している。 ・ 参観については、少しずつ可能になってきている。教員同士が互いの授業風景を見られるようになれば話し合いももるようにしていきたい。 ・ 乾隆小学校とは学校運営協議会での繋がりだけでなく、地域行事が再開されるものも増え、それを介して連絡や相談が増えてきている。施設を使わせてもらい園児が小学校に慣れることは少しずつ増えてきている。
	分析を踏まえた取組の改善
	<ul style="list-style-type: none"> ・ コロナ禍、現時点での管理職段階の連携を絶やさず、状況に応じて、教職員や子どもも含めた連携ができるようにしていきたい。 ・ 後期に向けて、就学支援シートや個別の指導計画等の活用を含め、特性のあるなしに問わらず小学校へのつなぎができるようにしっかりと子どもの見取りを行いたい。

	<ul style="list-style-type: none"> ・本園は幼保小の架け橋プログラムの研究をしている園ではないが、公立幼稚園として小学校との接続を考えるだけでなく、他の就学前施設との交流も視野に入れたい。
	<p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ前の状況にまでは戻らないとしても、少しでも対面での交流、連携ができるようになつたか。少しでも架け橋プログラムにつながる保育が実践できたか。 ・卒園児を各小学校にうまくつなぐことができたか。 ・保護者アンケートや日常の保護者からの聞き取りから検証する。

学校
関
係
者
評
価

学校関係者による意見・支援策

- ・コロナ禍、できないことも未だ多いと思われる。その中で、できることからやっていくしかないと思う。
- ・「架け橋プロジェクト」の話を聞いたが、幼稚園だけでなく保育園、子ども園とも連携して、小学校とつながっていく必要があることがわかった。幼稚園としてすべきことを構築していくってもらいたい。

最終評価

	<p>(中間評価時に設定した) 各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・後期には乾隆小学校との子ども同士の交流として、小学2年生の生活科でのフェスティバルの客として年長児が参加した。子ども同士の交流については今後もできることから進めていきたい。 ・運動会で乾隆小学校の運動場をお借りしたが、凧揚げやマラソン大会などことあるたびに運動場を使用させていただき、保護者参観の効果もあり高評価につながったと考える。 ・担任が入学予定小学校に電話をかけ、担当者と面談、電話連絡等で連携をとっている。就学支援シートや個別の指導計画等のやりとりは必要に応じて行っている。 ・今年度、乾隆小学校の子育て講座の講師として園長が出向いた。
--	--

アンケート結果③A100%

自己
評
価

分析(成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題

- ・少しずつではあるが、直接的な交流も可能になってきている。年長児も小学校に出向き授業に参加できたことは小学校を実際に見ることができるいい機会になったと思う。次年度は計画的に交流機会を小学校と共に考えたい。
- ・乾隆小学校の授業参観については、本園の教員の参加ができるようになってきている。現時点では卒園した園児のその後の様子が見られる目的であるが、今後は教員同士が互いの授業風景を見られるように広げたい。参観については他小学校にも働きかけていきたい。
- ・乾隆小学校の作品展に本園のコーナーをつくってもらっている。子どもたちも保護者もその鑑賞によって、幼稚園から小学校につながる子どもの育ちを見ることができた。

分析を踏まえた取組の改善

- ・コロナ禍ではあるが、少しずつ制限も緩和されつつあるので、乾隆小学校との連携交流については互いに無理のないようにより進めていきたい。幼小連携により園児にも児童にもプラスになるような活動を考え実行していくようにしたい。
- ・他の小学校についても卒園園児の引継だけでなく、年度の初めからできることを考え相談し、少しでも進めていきたい。
- ・幼保小の架け橋プログラムの研究園の成果を自園にも取り入れていきたい。公立幼稚園として他の就学前施設との交流も一步踏みだしていければよい。

学校 関 係 者 評 価	学校関係者による意見・支援策
	<ul style="list-style-type: none"> ・乾隆小学校との連携や交流は少しづつ元に戻っていっているのがよいと思う。 ・スタートカリキュラムや「架け橋プロジェクト」との話を聞いているが、実際に子どもたちがスムーズに就学前施設から小学校のカリキュラムに慣れるように互いに連携を深めてほしい。 ・乾隆育友会と乾隆保育会の連携は大事なことである。

(3) 預かり保育について

	具体的な取組
	<ul style="list-style-type: none"> ・社会全体で子育てを支えるうえで預かり保育が果たす役割を認識し、地域に周知するとともに、地域資源の活用を含め、その充実を図る。新2号や預かり時間の広報にも努める。(早朝8時も) ・安全、安心な環境で家庭的な雰囲気をつくる。 ・預かり保育指導計画を見直し、より望ましい活動を実施する。

	(取組結果を検証する) 各種指標
	<ul style="list-style-type: none"> ・預かり保育の参加人数とその活動内容や指導計画の見直し状況 ・新2号についての問い合わせ件数、利用家庭の割合 ・アンケート項目④「さくらんぼ組や預かり保育等の子育て支援の取組があることを知っている」 <p>⑫「子どもは楽しんで預かり保育に参加している」</p>

中間評価

自 己 評 価	各種指標結果
	<ul style="list-style-type: none"> ・預かり保育の参加人数として、毎月1度でも利用する人数は16人でこれは全体の76%に当たる。また今年度から実施された早朝保育も5名の参加があり、全体の24%の利用があった。 ・新2号は9名で申請中の方を含めると約半数の家庭が利用している。 ・アンケート結果④A86% B14%⑫利用者は全体の76%中A69% B31%
	分析（成果と課題） <ul style="list-style-type: none"> ・預かり保育の認知度は問題ない。早朝保育についても在園保護者には周知できて、必要に応じて利用が始まっている。 ・預かり保育として、サッカー教室や絵本の読み聞かせを月に1回～数回、ボランティアの方にお願いしていたが、コロナ禍になり頓挫していた。ようやく絵本ママの取組は2学期より再開できた。体を動かしてほしいという要望にはまだ応えられていない。 ・入園児を増やすためには、様々な方法で広報することが必要であるとホームページなどを活用し広報してきた。効果の程度の評価はできていない。
	分析を踏まえた取組の改善 <ul style="list-style-type: none"> ・新2号の方だけでなく、その時々の必要に応じて、活用しやすい預かり保育を目指していくようしたい。また絵本ママだけでなく茶道の活動も取り入れていきたい。 ・入園児の獲得のためにも、早朝預かり保育も含め、園の取組全体の広報を更に進めていきたい。 ・年少組の子どもたちも開始から利用が増えている。午後保育の始まりも含めて、預かり保育の始期も次年度に向けて検討したい。
	(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標 <ul style="list-style-type: none"> ・預かり保育の内容を含め、その運用が適切にされているか。 ・預かり保育の制度が十分に認知されているか検証する。

	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケートや日常の保護者からの聞き取りから検証する。
学校 関 係 者 評 価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・絵本ママの取組が再開できてよかったです。お茶の取組も考えているようであるが、人気のあったサッカーの取組も再開できるとよい。 ・午前8時からの早朝預かりが今年度より始まり、利用者が一定数いるのはニーズがあったからだと思う。ただ入園数につながるかは今後の検証によると思う。

最終評価

	(中間評価時に設定した) 各種指標結果
	<ul style="list-style-type: none"> ・預かり保育の制度があるから本園に入園できた園児がいる。園側の事情で預かり保育が中止になることがないように努めた。また変更はできるだけ早く伝えるようにしてきた。 ・制度の認知はアンケート結果からも分かるように問題がない。特に今まで利用がなかった層もサッカー教室や茶道体験の日の利用で全員が預かり保育を活用している。早朝預かりも周知できている。 ・新2号としての長時間保育も必要な方には定着した。約半数の家庭の登録がある。 ・アンケート結果④A100%利用者も 100%⑫A70% B30%
自己 評 価	<p>分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・早朝保育や長時間保育についても社会経済活動が元に戻ってきたおかげか必要な方が利用できるようになってきている。紙ベースでの利用希望、追加や変更手続きであったが、特に不都合はなかった。次年度からのアプリ運用もスムーズに行いたい。 ・預かり保育として、絵本ママの取組を2学期より再開したのち、サッカー教室や茶道体験を月1回ずつ入れるようにした。サッカー教室は外部の方に依頼しボランティアで来ていただいている。とても好評で利用者も多い。 ・3学期転入園児が複数名入った。幼稚園は時間的な面であきらめていたが、預かり保育があるので入ることができたという方がいた。園児獲得の重要な取組であるので今後も運用面で活かしていきたい。 <p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手紙や掲示板によって広報はできているので、必要に応じて預かり保育を活用できる状況にある。早朝預かり保育も定着している。担当者と管理する者の連携も問題ないが、今後アプリの運用はすぐに対応していくように体制づくりを行いたい。 ・サッカー教室や茶道体験については、予想以上に参加人数が増えた。次年度も同様に継続するとともに他にできるような内容も検討していきたい。 ・入園児の獲得のためにも、年少組の子どもたちの午後保育の始まりや預かり保育の始期も次年度に向けて検討したい。新2号ではなくても保護者の要望には応えられるようにしたい。
学校 関 係 者 評 価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サッカー教室等の再開を提案していたが、後期からでもできるようになってよかったです。参加人数が増え、参加した園児も喜んでいると聞いている。 ・預かり保育が入園数に直接関わっているかはわからないが、新2号も約半数いるのなら預かりがなければ更に園児数が減っていたかもしれない。早朝の預かり保育も効果はあると思う。

(4) 子育ての支援に関して

具体的な取組

- ・保育公開や自由参観などの教育発信に努め、開かれた幼稚園づくりを推進する。
- ・地域の児童館や地域諸団体との連携を図り、子育て相談や園庭開放を実施するなど、地域の子育て支援センターとしての役割を果たす。
- ・園庭開放を行うことで未就園児保護者が気軽にに入る空間づくりを考える。できだけ未就園クラス「さくらんぼ組」には顔を出し、気軽に相談を受ける雰囲気をつくる。

(取組結果を検証する) 各種指標

- ・子育て支援の取組回数や参加人数、教育相談件数
- ・未就園児保護者へのアンケート、聞き取りを実施する。
- ・アンケート項目④「さくらんぼ組や預かり保育等の子育て支援の取組があることを知っている」

中間評価

各種指標結果

- ・さくらんぼ組には毎回平均で5組程度の参加があった。園見学には学期に2組程度の参加であった。園庭開放の利用も少しずつ増えてきている。
- ・「ほっこり子育て広場」を再開した。学期に1回程度する予定である。第1回は申込制で7家庭の参加であった。これは約3分の1になる。
- ・園長が毎回さくらんぼ組に出向き、未就園保護者の方からの聞き取りを行っている。
- ・アンケート結果④A86% B14%

自己評価

分析（成果と課題）

- ・今年度は「さくらんぼ組」も休止期間がなく、毎月の便り通りに実施することができた。そのためか参加者は昨年よりは増えてきている。登録者数を増やす効果は、夏まつりやゆずります会の保育会主催イベントが大きく寄与してくれた。
- ・「ほっこり子育て広場」は以前、子どもの誕生会に合わせて実施していたが、園児数が減り、毎月の実施が困難になった。そこで今年度、学期1回の申込制で再開した。前期はまだ1回のみだが、子育てについての情報交換の場になればよいと考える。
- ・便りを小規模保育園や児童館にも置かせていただいたり、ホームページに掲載したり広報に努めている。

分析を踏まえた取組の改善

- ・「さくらんぼ組」も毎月途切れることなく継続したことは大きい。今後も保育会との連携の上、登録者が増えるように取り組んでいきたい。
- ・広報についても保護者間の口コミはとても影響力はある。今後も保育会との連携は密に行っていきたい。
- ・小規模保育園等のチラシを置いていただく施設の開拓やホームページの発信は今後も継続していきたい。

（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標

- ・未就園クラスの登録者、参加者の数や参加保護者の聞き取りから検証する。
- ・子育て支援の取組についての実施状況をみる。
- ・保護者のアンケートや日常の保護者からの聞き取りから検証する。

学校 関 係 者 評 価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入園児数を増やすには、子育て支援の取組が必須だと考える。今年度はできる取組も増えたようなので、保育会が実施した乾隆幼稚園まつりのような集客力のあるものを今後も取り入れられるとよい。 ・さくらんぼ組や園庭開放の取組を地道に継続していくことは、決して遠回りではないと思われる。今後もホームページをはじめ、小規模保育所にチラシをもっていいくなど広報に努めても良いたい。
-----------------------------	--

最終評価

	<p>(中間評価時に設定した) 各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中間期にも未就園クラス「さくらんぼ組」の登録数が増えていること、参加人数が増えていることを記載したが、後期もその傾向は続いている。新しく園庭開放に来られる方もいる。 ・園長が毎回「さくらんぼ組」に出向き、未就園保護者の方からの聞き取りを行っている。小規模保育所や児童館等へのチラシ配布やホームページでの広報も継続している。 ・「ほっこり子育て広場」は希望制で第2回は実施できたが、インフルエンザの流行により第3回は中止した。あらゆる場面を捉えて子育てに関する話はするようにしている。 ・アンケート結果④A100% 在園保護者の認知度は高い。
--	--

自己 評 価	<p>分析 (成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度の「さくらんぼ組」は年間通じても休止期間がなく、毎月の計画通りに実施することができた。ほぼ定期的に参加する方が初めての方に園のことを話してくれるなど口コミの広がりも見えてきた。継続は力なりと改めて感じた。 ・「さくらんぼ組」の予定表を小規模保育園や児童館にも置かせていただいたり、ホームページに掲載したり広報に努めている。特に前月の中旬にはお知らせするようにしている。園に足を運んでもらうのが第一歩なので、広報の工夫は今後も考えたい。 ・子育て支援としての「ほっこり子育て広場」はまだうまく機能していない。このまま感染対策の制限が緩まるのであれば、在園児の子育て講座を軌道に乗せたい。
--------------	--

	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次年度「さくらんぼ組」が毎月途切れることなく継続できれば、少人数であっても次年度2歳児のクラス枠をつくり、より3歳児クラスに向けての経験を増やす取組を考えたい。曜日の見直しも考えたい。 ・園支援システム(バスキャッチ)のアプリを未就園の方にも登録してもらう方向で検討していく。 ・アンケートから見ても保護者の認知度は高く、園児の減少についての現状をいっしょに心配してくれている。次年度も保育会との連携は密に行っていきたい。 ・小規模保育園や児童館等のチラシを置いていただく施設の開拓やホームページの発信は今後も地道に継続していきたい。
--	--

学校 関 係 者 評 価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「さくらんぼ組」が一年通じてできるなど昨年に比べてできることが増えてきている。少人数の中でも転入園児が来たり、今まで以上に遠方の方が来たりしているようであるが、幼稚園がやれる工夫を今後も続けてもらいたい。 ・さくらんぼ組の日数を増やしたり、曜日を組み替えたりすることは簡単にはできなのかもしれないが、新規の未就園児を増やすことについては色々な可能性を探っていくことは必要である。
-----------------------------	--

(5) 地域とのかかわり（社会に開かれた教育課程）について

具体的な取組

- ・学校運営協議会委員の方との情報交換や連携強化に努め、関係者評価を活用し、教育活動の改善を図る。また積極的に地域の行事に参加するなど、地域とのつながりを大切にする。
- ・地域の資源を活かした指導計画を作成する。
- ・自園の取組や教育内容をHPや幼稚園地域版だよりで発信し、開かれた幼稚園づくりする。

(取組結果を検証する) 各種指標

- ・日々のつながりから、地域の方々の声を受け止める。
- ・アンケート項目③「保幼小連携、地域との連携等の取組は子どもの育ちにつながっている」

中間評価

各種指標結果

- ・今年度は乾隆まつりが開催された。園児がステージコーナーに出演し保育会がブースを担当した。地域の中の幼稚園としてアピールできたと思う。乾隆敬老会は中止になったが、嘉楽学区の敬老会には年長児が顔を出す予定である。
- ・乾隆交通安全会の方の登園時見守り以外にも、地域女性会の方から緑のカーテン事業として「洛いも」の苗をいただいている。また運動会には体育振興会の方に施設や設備面でとてもお世話になった。民生児童委員の未就園児取組「すくすくクラブ」には広報で協力している。そういう関係を通じて地域の方と話す機会も格段に増えてきている。
- ・乾隆学区回覧版の園だより（地域誌）を月1回発行し、園門横に掲示している。

自己評価

分析（成果と課題）

- ・昨年度は、学校運営協議会の理事会も紙面での開催になり、関わりも幼稚園のお便りを届ける時にお話しするぐらいだったのが、園内で理事会がもて直接ご意見がいただけるようになった。
- ・地域のイベントも再開されるものが増えてくると直接お会いして地域の方と話すことも増えた。幼稚園としても様々な協力を得ることができた。
- ・回覧の地域版乾隆幼稚園便りも中身に関してのご意見を頂戴する事があるので、今後も内容を充実しながら続けていきたい。

分析を踏まえた取組の改善

- ・学校運営協議会の委員の方は勿論、多くの地域の皆様とのつながりがもてるようになってきた。お便りを配布するときなど積極的に地域を歩き、話ができるようにしていきたい。
- ・上記の通り、乾隆まつりや乾隆学区民運動会が開催されることで地域の方と話す機会が増えた。未だ開催されていないものにもアンテナをしっかりと張って、つながりが途絶えないようにしていきたい。

（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標

- ・日々のつながりから、地域の方の声を受け止められているか。
- ・保護者のアンケートや日常の保護者からの聞き取りから検証する。

学校関係者評価

学校関係者による意見・支援策

- ・3年ぶりに乾隆まつりに参加してステージコーナーに年中児と年長児が参加できた。保護者の感想も好印象だったようなので、今後も機会があれば、地域の中に子どもの姿を見せていいたい。
- ・地域誌の発行やお便りを配ってもらうことで幼稚園の様子についてはよくわかる。今後、来賓を制限なしで呼べるようになることは望ましいが、当面は広報に力を入れてほしい。

最終評価

(中間評価時に設定した) 各種指標結果	
<ul style="list-style-type: none">・今年度も学校運営協議会の理事の方にはお便りを定期的に届け、その道中にお会いすることができれば直接話を伺っている。「もちつき」がコロナ禍でもできているのは地域の方のおかげである。・年長組の織機の取組では、地域のゲストティーチャーに園に来ていただき教えていただいた。「織成館」の見学も地域の方の計らいで継続している。・交通安全会の方には小学校登校後、幼稚園の時間帯も見守っていただいているが、年長児の親子交通安全教室にも協力していただいた。・乾隆学区回覧版の園だより（地域誌）の発行は継続できた。・アンケート結果③A100%	
自己評価	
分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題	
自己評価	<ul style="list-style-type: none">・今年度は、普通に学校運営協議会の理事会をもつことが出来た。紙面開催の頃から考えるとマスク越しとはいえ、直接ご意見をいただけるようになったことはよかったです。・すべてではないが地域のイベントが再開されてきた。地域の方とも直接お会いして話すことが増え、幼稚園としても様々な協力を得ることができたと思う。少しずつであるが、以前の関わりのよい所を増やしていきたい。・保護者参観はほぼできたが、まだ地域の方を招待することはできていない。次年度は少しづつ園に入っていただくことができればよいと思う。・本園の特色につながる織物関係は次年度にも繋いでいきたいと考えている。
分析を踏まえた取組の改善	
自己評価	<ul style="list-style-type: none">・地域を歩き、多くの地域の皆様とのつながりがもつことが重要だと考える。ホームページや地域誌も効果的な面はあるが、積極的に地域を歩き、実際に顔を合わせて話ができるようにしていきたい。・乾隆まつりや乾隆学区民運動会等の開催はコロナ禍で縮小しているとはいえ、大きな盛り上がりを見せた。その場に参加することで地域の方と話す機会が増え、つながりが途絶えていないことが分かった。次年度に向けても大切にしていきたい。年度終わりには乾隆学区の催しを本園の場を提供して実施する予定である。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策
学校関係者評価	<ul style="list-style-type: none">・少しづつ地域の中に子どもが戻ってきてているのはよい。少人数にはなっているが次年度に向けて明かりが見えてきたと思う。今後も機会があれば、地域の中に子どもの姿を見せていてもらいたい。・地域誌の発行やお便りを配ってもらうことで幼稚園の様子についてはよくわかる。今後、以前のように地域の者が自由に参観できるようになってくることを期待しているが、ホームページなどで園の様子が分かるように発信は続けてもらいたい。

（6）教職員の働き方改革について

重点目標
教職員一人一人が生き生きとした姿で子どもと向き合い、心豊かな生活を送る時間を確保する。
具体的な取組
<ul style="list-style-type: none">・園行事の精選を考える。・働き方改革の研修を行う。

- ・会議の効率化と分掌の適正化を図る。(特に校務支援員が活躍できる取組を考える)
- ・教職員一人一人が勤務時間を意識し、子どもと向き合う時間を十分に確保する。

(取組結果を検証する) 各種指標

- ・教職員の勤務時間への意識と働く意欲 (超過勤務の削減の目標値の設定)
- ・年休取得率
- ・アンケート項目⑦「教職員は生き生きと働いている」

中間評価

各種指標結果

- ・働き方改革の話題が出て久しい。職場の意識としても定着してきていると思う。校務支援員の配置により仕事量が少し減っているのは大きい。
- ・研修等を通して、年休取得や超過勤務削減への意識はできている。
- ・アンケート結果⑦A86% B14%

自己評価

分析 (成果と課題)

- ・今年度、総合育成支援員も校務支援員も本園に入る時間数をフルで勤務してもらえた。コロナ感染症が収束していない中、消毒や環境整備など分担できる仕事を受け持つてもらうことで担任は本務に時間が割ける。意欲が増すことの一助になり働き方改革につながっていると考える。
- ・幼稚園の教職員数は少ないので、一人が受け持つ仕事は多いが、その分連絡や相談がしやすく極端な仕事の偏りは解消されていると思う。
- ・教職員の勤務時間が様々であることも含め、会議は必要最低限の回数と短い時間で行い、効率化は図られている。

分析を踏まえた取組の改善

- ・コロナ禍で中止になっていた行事が再開できるようになったので、仕事量は戻ってきたがコロナ前の行事をそのまま戻すのではなく、子どもが活躍できるもので、教員に意欲が出る行事を再構築していきたい。
- ・教職員それが意欲的であることは勿論、計画性や段取りをつけ、超過勤務削減のように時間を意識するようにしていきたい。

(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標

- ・会議の効率化を含め、働き方改革を意識した勤務状況であるか検証する。
- ・年休取得率や超過勤務時間
- ・保護者アンケートや日常の保護者からの意見から検証する。

学校関係者評価

学校関係者による意見・支援策

- ・子どもたちの元気に過ごす源は、教職員が生き生き過ごしているかということにつながる。教職員が意欲をもって働くためにも働き方改革は推進していってもらいたい。
- ・校務支援員のような職員が配置されることによって、担任が子どもに関わる仕事に専念できるというのがよい。

最終評価

(中間評価時に設定した) 各種指標結果

- ・会議は必要に応じて行い、枠を設定しているからとにかく会議をするというところから、出席者の勤務時間や必要事項に応じて効率化を図った。教職員間のコミュニケーションは絶えず意識した。
- ・それぞれの事情に応じて年休取得はできている。超過勤務も毎月を振り返ることで意識できた。

- ・校務支援員の配置により個々の仕事量が少しづつ減っているのは大きい。
- ・アンケート結果⑦A85% B15%。ほぼ全員の保護者から、「教職員が生き生き働いている」という項目について高評価いただいている。

自己評価	<p>分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本年度、校務支援員が新任に交代したが、依頼する教職員側が、コロナ対策での消毒、教材製作等仕事内容を明確に伝えられるようになったので、校務支援員の配置の効果は減っていない。後期、校務支援員が仕事に慣れ、確実に一人一人の仕事の軽減につながっていると言える。 ・コロナ禍で研修の形が変わり、集合研修は必要なものだけになり、リモートでの研修が増えた。自分のしやすい時間帯を選べるものもあり、園での仕事との調整がうまくいった。時短に直結したと考える。 ・コロナ禍とはいって、少し対応にゆとりが出たため、教員は子どもに向かう時間確保ができた。子どもについて研修や日常の話し合いを増やし生き生きと活動できた。
学校関係者評価	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・より自分が子どもと関わる時間確保と超過勤務削減のために、校務支援員という人材を活用することを考えられるようになる。いつ何をしてもらうのかを明確に指示できるようにしたい。 ・絶えず、教職員一人一人が自分事として働き方改革を意識した職場になるように、互いに声をかけ合い出来るような職場を目指したい。（明るい職場の雰囲気づくり） ・一日の中でも効率よくできる時間帯がある。個々の教職員の事情も鑑みながら、それぞれ一人一人が取り組む目標を意識して実践していくように共通理解したい。 <p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今回も「教職員は生き生きと働いている」の項目が高評価なのはよい。子どもたちのたちの成長のため、教職員が元気なのは大切である。 ・ここ数年、コロナ禍で消毒作業など増えたと聞くが、校務支援員が配置されることで、本来の子どもに向かう仕事が超過勤務削減ができるようになっているのはよい。